

プラテュス *πλατύς*



◆巻頭言

保健医療現場のピクトグラムとコミュニケーション 1
保健科学院 副学院長 良村 貞子

◆センター紹介

環境健康科学研究教育センター 2
副センター長 特任教授 岸 玲子
健康科学分野 教授(センター長) 齋藤 健

◆研究室紹介

病態解析学分野 心血管エコー研究室 3
病態解析学分野 教授 三神 大世

◆新任教員紹介

機能回復学分野 教授 遠山 晴一 4
基盤看護学分野 助教 野田 なつみ

◆海外便り

ネパール生化学者会議にて研究発表 6
保健科学コース 修士課程1年 堀岡 希衣

◆学生寄稿

「人、人生、生活」について学ぶ 7
医学部保健学科 作業療法学専攻4年 武藤 直哉

◆国際シンポジウム開催報告

The First FHS International Conference: Evolving Health Sciences in Asia 8
保健科学研究院 国際交流専門部会長 山内 太郎

◆報告事項

..... 9

保健医療現場のピクトグラムとコミュニケーション

保健科学院 副学院長 良村 貞子

1980年代以降広く使われるようになってきたといわれているピクトグラム(Pictogram)は、一般に「絵文字」「絵単語」などと呼ばれる、何らかの情報や注意を示すための視覚記号(サイン)の一つです。非常口のピクトグラムは代表的なものです。案内所のピクトグラムも、鉄道や空港、観光地などの公共的な空間で、誰もがすぐにその目的や意図、意味を理解しやすい指標となっています。



国際化が進む中、ピクトグラムでは単純化された絵の力が最大限に発揮されています。文字はお互いの意思疎通を促す大切な道具ですが、文字や言葉の意味がわからない場合、誤解が生ずることも少なくありません。

ここ数年、保健医療現場でもピクトグラムが多くみられるようになってきました。これは、医療が高度化・複雑化する中、医師・看護師等と事務や看護補助者の職員等がチームを編成してチーム医療を進めてきていることも一因となっていると思います。また、入院期間の短縮化に伴い、入退院がめまぐるしく、患者や家族、面会者など、医療を受ける方と提供する側の双方に多くの人々に関わる現状がみられます。コミュニケーションのうち言語によるものは35%と言われています。少しでも互いの共通理解を進めるために、「絵」の力をかりる動きがでてきたのだと思います。

例えば、右のピクトグラムのように、検査のため、朝食を摂取できない時は、絵も合わせて説明した方が誰もが確認できます。看護師は前日からなぜ朝に食事ができないかを説明しますが、



職員が誤って食事の配膳をしてしまうかもしれません。患者さんは目の前に食事がきたため、ついうっかり食事をしてしまうこともあります。超高齢社会では、何度確認してもしすぎることはありません。

これらのピクトグラムは医療者だけではなく、同室者がいる病室では、患者同士でも確認し、注意し合うことが可能となります。また、食事をするのができない場合でも、定時に薬を服用しなければならないことがあります。この場合、水を飲むことができるかどうかわからなくなることがあります。服薬時に水を飲むことができるピクトグラムは、患者さんに安心感を与えることができます。文字だけでは、簡略化したわかりやすい絵は思い込みというエラーを少しでも防ぐことに役立つと思われる



しかし、いつまでもピクトグラムがベッドサイドに置かれたままでは、次のエラーが発生する可能性もあります。有効な手段が危険を招く場合も少なくありません。そのことを十分認識し、患者・家族に安心と安全な保健医療を提供する工夫を続けたいと思います。

しかし、いつまでもピクトグラムがベッドサイドに置かれたままでは、次のエラーが発生する可能性もあります。有効な手段が危険を招く場合も少なくありません。そのことを十分認識し、患者・家族に安心と安全な保健医療を提供する工夫を続けたいと思います。

環境健康科学研究教育センター

副センター長・特任教授 岸 玲子 / 健康科学分野 教授(センター長) 齋藤 健

環境健康科学研究教育センターは、学内共同教育研究施設として平成22年4月に設置されました。本センターは、全学の関係者に対してより開かれた組織として、「環境と健康」分野の新しい研究プロジェクト開発と推進、人材育成に資する体制を確実に構築することを目標としています。発足から当初2年間は医学研究科(公衆衛生学分野)出身の岸玲子がセンター長を務め、現在は保健科学研究院教授の齋藤健が2代目の任についています。医学系はじめとする保健医療系や理工系、教育学や心理、倫理などの人文社会科学系を含む学内他部局、さらに他大学、自治体、研究機関等との組織的な連携体制より人々の環境と健康をめぐる課題に専門的に取り組むことで、多様な共同研究や教育を展開させる基盤となり、国内外のリーダー的な役割を果たすことができると考えています。具体的な活動については以下の通りです。

1. プロジェクト研究推進部門

本センターの主たる業務として、研究プロジェクトを推進させることがあります。その一つ目の柱になるのが、環境省が、2011年から2032年まで国の事業として実施する「子どもの健康と環境に関する全国調査(「エコチル調査」)です。この他に、進行中の大きなプロジェクト研究としては、(1)「環境と子どもの健康に関する北海道研究(2001年に開始した2万人規模の出生前向きコホートで、エコチル調査のモデルになった北海道スタディ)」、(2)室内空気質と健康に関する研究(全国規模のシックハウス症候群に関する大規模疫学研究)、(3)働く人の健康に関する研究(4)高齢者サポートネットワーク研究などがあります。

なお、本センターが取り組む研究テーマ「化学物質をはじめとする環境要因の人へのリスク:特に次世代影響の解明」は、世界レベルでみて北大に優位性がある研究テーマとして選定されています。

2. 研究支援部門

環境健康科学研究教育センターで行う長期的で公共性の高い環境健康科学研究を継続的円滑かつ安全に推進するために、倫理と安全リスク管理、科学コミュニケーションに関する支援体制を整えると共に、最新の情報を国内外に広く発信するための広報活動、セミナー・講演会の実施、大型研究プロジェクトを展開するための研究コンサルテーションを行っています。

3. 国際連携部門

研究成果を国内外へ発信すること、特に海外の研究拠点との密接な情報交換及び人的交流を通じて、環境

健康科学分野における国際的な取り組みを積極的に推進しています。

センター開設当初から、北海道大学で開催している「サステナビリティウィーク」で国際シンポジウムを継続的に主催しているほか、2012年にはBiCCA(Birth Cohort Consortium of Asia)を設立参画し、国立台湾大学、韓国ソウル大学や梨花女子大学とともにアジアでの出生コホート研究連携の一端を担っていくこととなりました。その発展のため2013年2月には大学間協定校協力事業も兼ねて当センターにおいて会議を行いました(写真)。さらに、WHO Collaborating Centre設置に向け、WHO/WPRO(WHO西太平洋オフィス)らと連携して、準備を進めています。

4. 連携教育推進部門

「Public Health」を担う次世代の研究者を教育・育成するため、随時、客員研究員、専門研究員、訪問研究員の受け入れを進めています。また、大学院共通科目「社会と健康」を擁し、学内各研究科(学院)の多彩な教員による講義を構成することで、広い視野を持った研究者の教育を目指しています。設立当初から、公衆衛生分野における高度な専門知識を持った人材育成のためにはどのような教育体制が必要か、本学はじめ札幌医科大学、旭川医科大学など道内大学間の連携を模索してきました。この度、北海道公衆衛生協会第11号課題研究として「北海道における「公衆衛生専門大学院」の役割と設置への協力体制などについて」が採択され、北海道の現状を知り、また東京大学など既に公衆衛生大学院が設置されている先行事例を学ぶため2013年3月にフォーラムを開催しました。今後は北海道内の関係機関へのニーズ調査により、本学の保健医療系、獣医、薬学、衛生工学、食品衛生などの関連分野と、他大学や行政(北海道、札幌市など)、および民間諸機関とどのように連携協力して専門的な大学院教育を進めていくか検討していく予定です。



■BiCCA(Birth Cohort Consortium of Asia)の国際会議
(2013年2月 札幌)

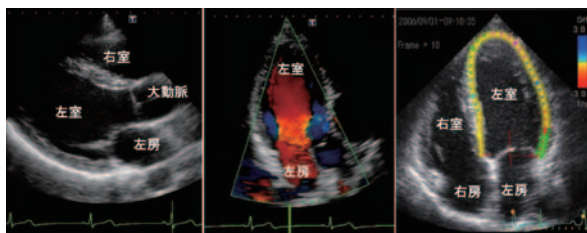
病態解析学分野 心血管エコー研究室

病態解析学分野 教授 三神 大世

心血管エコー研究室は、今や超音波（エコー）検査の大半を担うようになった臨床検査技師の視点から、心血管系を中心とする超音波検査（図1）の臨床的問題点の解決やその新しい臨床応用に取り組んでいます。北大病院のエコー検査室と連携しつつ、臨床研究の基礎となる検査現場での実践的な超音波エコー検査研修も実施しています。これらを通じて、自ら考えながら検査を深めることのできる技師、検査現場で指導的な役割を担う技師、そして研究を担い後進の指導にあたる教育研究者を育成することが、当研究室の最終的な目標です。

今や超音波検査は、ほぼすべての臨床領域で使われ、その診断情報の豊富さや非侵襲性などの優れた特性から、その利用はさらに広がりつつあります。この検査法の唯一ともいえる欠点は、検者依存性です。超音波検査では生体の断面像や血流像を手軽に得ることができますが、検者の微妙な手さばきはその情報量に大きく影響します。画像の撮り方には無限大の自由度があり、しかもそのリアルタイム性が後戻りを許しません。このため、検者には、技能と熟練だけでなく、多様な病変に対応しうる幅広い医学知識が求められるのです。

このような状況を踏まえて、日本超音波医学会は、この検査への熟達を証明する超音波検査士資格を認定しています。その取得には、最低4年の検査経験と相応の知識と読影能力が必要で、通常は卒後5年から10年はかかります。認定者は既に累積2万人を超えています。なおも受験者の伸びは衰えをみせず、熟練検者への



■図1. 心エコー画像

心エコー検査では、心臓内部の構造や動き（断層法、左図）、血液の流れ（カラードブラ法、中央図）、心筋の動き（スペックルトラッキング法、右図）などを、リアルタイム動画で観察・計測することができます。

需要の大きさを物語っています。一方、超音波検査教育の大部分は、卒後の臨床現場での先輩から後輩への技術伝授と研修会参加など本人の自助努力に委ねられています。学校教育の難しい分野であることは確かですが、技師教育の現場に超音波検査の専門家が不相応に少ないことも、その大きな理由のひとつと思われます。

わが心血管エコー研究室は、このような時代の要請にいち早く応じた、たいへんユニークな研究室です。指導教員は、三神大世（教授、日本超音波医学会認定超音波指導医・専門医）と加賀早苗（助教、日本超音波医学会認定超音波検査士、日本心エコー学会認定専門技師）の2名で、学術研究員1名（本学博士課程卒業、日本超音波医学会認定超音波検査士）、博士学生1名（日本超音波医学会認定超音波検査士）と修士学生4名からなり、毎年、学部学生5～8名の卒論を指導しています（図2）。

当研究室は、今年ようやく最初の博士課程卒業生2名を出したばかりですが、彼らと修士卒業生6名すべてが超音波診断のエキスパートとして、本研究院、北海道大学病院、中核的な臨床病院、超音波機器メーカーなどで活躍を始めています。将来的には、病院検査現場のみならず、機器メーカーや教育研究機関などで指導的な立場に就き、超音波検査のさらなる発展を牽引する人材になってくれるよう願っています。



■図2. 病態解析学分野心血管エコー研究室のメンバー

ご挨拶

機能回復医学分野 教授 遠山 晴一



この度、平成25年4月1日付けをもちまして機能回復医学分野教授に就任させていただくことになりました。

私は昭和60年に松野誠夫教授(現北海道大学名誉教授)が主宰される北大整形外科に入局し、整形外科一般研修の後に下肢診療グループに所属し、基礎研究では生体軟組織のバイオメカニクスにおいて世界的権威であった本学応用電気研究所林 紘三郎教授(現大阪大学名誉教授)のもとで腱・靭帯組織の生体力学に関する研究に着手いたしました。平成3年には金田清志教授(現北海道大学名誉教授)のご紹介で米国Vermont大学に留学し、スポーツ整形外科の権威、Robert Johnson教授(現Vermont大学名誉教授)ならびにPer Renstrom教授(現Karolinska Institute名誉教授)の指導のもと、スポーツ外傷に対するバイオメカニクス学的研究に従事させていただきました。その後、米国Columbia大学に移り、関節軟骨に関する生体力学の権威、Van Mow教授およびMichael Lai教授のもとで関節軟骨におけるtriphasic theoryに関する研究を行う機会を得ました。平成10年には安田和則教授(現本学副学長)が開設された本学医学部生体医工学講座の助手として採用され、これまで行ってきた腱・靭帯組織に関する生体力学的研究に生物学的手法を加えるとともに、スポーツ医学に関する診療および教育を行ってまいりました。その後、平成18年に北海道大学病院リハビリテーション部に准教授として移動し、北海道大学病院リハビリ

テーション科生駒一憲教授をはじめリハビリテーション科の諸先生からリハビリテーション医学に関して多くのことを学ばせていただきました。この間、代表的なスポーツ外傷の一つである前十字靭帯損傷に関する「前十字靭帯損傷診療ガイドライン2012」の改訂を策定委員長として行う機会を得、また、「Arthroscopy (IF 3.10)」や「BMC Musculoskeletal Disorders (IF 1.88)」などのスポーツ医学・整形外科関連の国際誌のeditorial board に参画させていただいております。

今後、北海道大学病院での診療活動と保健科学研究院での研究活動を有機的に融合し、「スポーツ傷害の予防に関する研究」ならびに「運動器疾患に対する運動療法に関する研究」を中心に行ないたいと思っております。つきましては皆様からのご指導ならびにご鞭撻を賜りますようどうぞよろしくお願い申し上げます。

ご挨拶

基盤看護学分野 助教 野田 なつみ



平成25年7月1日より北海道大学大学院保健科学
研究院基盤看護学分野に赴任致しました。

私は学部での授業で学んだ生理学への興味から、北海道大学大学院医学研究科の修士課程に進学し、時間生理学分野(本間研一教授)にて概日リズムに関する研究を行いました。ヒト隔離実験によるホルモンリズムの変化に関する研究への参加や培養細胞における時計遺伝子の発現変動を生物発光技術によりモニタリングし、研究の面白さを学びました。また、医師、薬剤師、臨床検査技師、放射線技師、栄養士などの多くの先輩や友人に恵まれ、研究以外にも生物や医療に関連した学びの機会を頂くことが出来、充実した2年間を過ごさせて頂きました。

その後、旭川医科大学病院で病棟看護師として勤務し、素晴らしいスタッフの方々と出会い、貴重な臨床経験をさせて頂く中で、疾患発症のメカニズムや薬剤の作用機序、測定装置の原理などにも興味が広がりました。退職後、北海道大学大学院生命科学院の博士課程に進学し、医学研究科に転科後、ルシフェリン・ルシフェラーゼを用いた生物発光に関する研究を行い、発光イメージングについて学びました。学位は細胞周期に関する研究を行い、in vitroでのNotchシグナリングを介した細胞分裂停止メカニズムの研究で取得致しました。

博士課程修了後、生物に対する知識を深めるため、学術研究員として北海道大学大学院理学研究院にて

植物を用いた研究を行い、引き続き細胞周期に関連して植物のサイクリン依存性キナーゼの機能解析を行いました。昨年からは鳥取大学に移り、プロジェクト研究員としてマウス人工染色体ベクターを用いたin vivo光イメージングの研究を行いました。鳥取大学が得意とする技術である人工染色体ベクターを用いて研究することが出来、遺伝子工学に対する知識を深める機会を頂きました。また、マウスES細胞の取扱いを学んだことも大変貴重な経験となりました。

この度、北海道大学で再び研究に携わる機会に恵まれ、大変光栄に思っております。修士課程で初めて行った細胞培養実験の面白さは今でも忘れられず、研究を続ける原動力となっております。今後は肝臓の病態生理・再生や光イメージングに関する研究に参加させて頂き、微力ながら北海道大学の保健医療の発展に貢献させて頂けますよう、精進して参る所存でございます。教育におきましては大変未熟ではございますが、日々学ばせて頂きながら成長していきたいと思っております。

皆様からの御指導、御鞭撻を賜りますよう何卒宜しくお願い申し上げます。

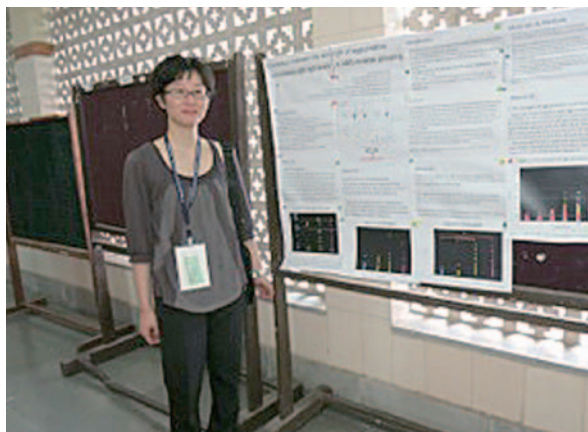
ネパール生化学者会議にて研究発表

保健科学コース 修士課程1年 堀岡 希衣

2013年4月4日、5日にネパール・ダーランで開催されました第2回ネパール生化学者会議(BANCON2013)に参加してきました。ダーランはネパールの首都、カトマンズから約300km東方に位置する都市です。ネパールと言えばエベレストを有するヒマラヤ山脈。そのイメージが強く寒い所かと思っていました。しかし、ダーランは沖縄本島とほぼ同緯度で、日中の気温は30°Cを超えましたが、標高800m程度の高原で湿度は20%と乾燥しており、むしろ過ごしやすい気候でした。会場のKoirala Institute of Health Sciences大学は、広大な敷地内に大学と付属病院、職員宿舎などが併設されており、雰囲気は北大に似ています。

本学会では、卒業研究として取り組んできましたABO式血液型ウラ試験の凝集強度と免疫グロブリン値について発表しました。ABO式血液型ウラ試験は患者血清とA、B型血球試薬を反応させる検査です。凝集の強度は患者間で異なり、免疫不全や年齢、基礎疾患、服薬といった免疫グロブリン値の低下する因子がない場合でも、弱い凝集を呈する検体が見られます。免疫学的手法を用いて、凝集強度と免疫グロブリン値の関係性を解析するといった内容です。

こちらの地域でも糖尿病、脂質異常症といった生活習慣病は重要な問題であり、学会では生化学を中心とした検査の研究が主に発表されていましたが、免疫学、血液学などに関わる演題も散見されました。食生活・



住生活の異なる国の検査データを拝見できた事は大変新鮮でしたし、現在日本で行なわれている検査技術が、今後南アジアの地域でも生かせるはず、と感じました。

さらに大会長のご好意で大学と付属病院の見学をさせて頂きました。病理検査は大学で、生化学・血液・細菌・輸血検査などは病院で行なっています。検査室には比較的新しい機械が配備されており、ネパールでは日常的な停電と格闘しながら(そのため、自家発電装置や蓄電設備が完備されています)仕事をされていました。特徴的なのは、病院の敷地内に熱帯感染症に特化した施設がある事です。ネパールではリーシュマニアという原虫が引き起こす疾患の罹患者が多く、隔離病棟と検査室が存在します。もちろん、日本ではほぼ見られない疾患ですので、リーシュマニアの検査について教えて頂けたことはかなり貴重ですし、原虫好きの私にとっては最高の体験となりました。

学会発表を通じてたくさんの検査技師や医師と交流できたことは、大変刺激的だった一方、英語力不足を痛感しました。もっと英語が話せたら、よりコミュニケーションを深められたと思います。ネパールで見て、聞いて、感じてきた事を、今後の研究や検査技師業務に生かしていきたいと思っています。

最後に、このような発表の機会を設けて頂いた政氏伸夫准教授、本研究のご指導を賜りました小林清一特任教授に感謝申し上げます。

「人、人生、生活」について学ぶ

医学部保健学科 作業療法学専攻4年 武藤 直哉

私は6月中旬から8月上旬までの8週間、帯広市の病院で臨床実習をさせていただきました。精神科の病院であり、デイケアに参加させていただくのは初めての経験で最初は戸惑いました。しかし、デイケアメンバーは積極的に話しかけてくれる方も多く、カラオケやスポーツ、作業活動、レクなど時間と場所を共有することで自然と打ち解けることができました。

この実習では、人、人生、そして生活について考え、学ぶ機会となりました。それぞれの疾患の障害特性も実際にメンバーと接して学ぶことはできましたが、診断名がついていても病気は一つとは限らず、人間のつくりというのは複雑で、さらに病気も個人を形成する一つの要素でしかない気付かされました。病気が原因となることももちろんありますが、性格や生活環境、個人の歴史などが生きることを困難にしている場合があるので、作業療法では、病気にスポットを当てるのではなく一人一人の人物の全体像を評価し、サポートしていくことが大切なのだと学びました。

この実習では、集団の中で一人一人を評価、治療することができた一方で、一日一人のメンバーについて記



録を書くことを経験し、個人の特徴と周囲との関係性を注意して見ることができました。メンバーとの会話や日々の活動を一緒に楽しむことができ、一人の仲間として参加できたように思います。頼られることも世話をしてもらうこともあり、メンバーやスタッフの方々とも良い関係を築き、毎日楽しんで実習できてよかったです。別れは寂しく、辛いことでしたが、「頑張ってるね」「ありがとう」と声をかけていただき、ああ、長い人生の中で同じ時間を過ごせて良かった、と思いました。メンバーに良い影響を与えられたかどうかはわかりませんが、同じように出会えて良かったと思ってもらえていたら嬉しいです。今となっては皆さんの日々が少しでも楽しくなることを願うことしかできませんが、この先も私が残してきた作品を見たときや、ふとしたときに一緒に過ごしたことを思い出して、元気や勇気を与えることがあればいいなと思います。

今回は、学生として病院で実習させていただく最後の機会でもありました。学生でいられるのは残り半年と僅かですが、これからは卒業研究、国家試験など忙しくなります。しかし、それらの過程、さらには就職し、社会に出た後にも必ず実習で学んだことが活かされることと思います。実習での多くの方々との出会いや貴重な経験を糧に、将来に希望を見出してより一層精進していきたいと思えます。

The First FHS International Conference : Evolving Health Sciences in Asia

保健科学研究院 国際交流専門部会長 山内 太郎



2013年7月5日(金)医学部臨床大講堂において、本研究院主催の第1回国際シンポジウム(The First FHS International Conference: Evolving Health Sciences in Asia)を開催いたしました。昨年2012年12月に部局間協定を締結したインドネシアのデポネゴロ大学/Dr.カリアディ病院、同じく2012年12月に部局間協定を締結した台湾の台北医学大学、さらに国内より研究者を招待しました。

招待発表者はデポネゴロ大学/Dr. カリアディ病院からDr. Malia Mexitalia(小児科学、栄養代謝疾患コンサルタント)とDr. Rudy Handoyo(リハビリテーション部長)、台北医学大学からはProf. Hung-Yi, Chiou(副学長・公衆衛生学部長)とProf. Chia-Chin Lin(看護学部長)、そして筑波大学医学部から大橋順准教授(人類遺伝学)の5名でした。栄養学、理学療法学、公衆衛生学、看護学、人類遺伝学といった、保健科学(Health Sciences)がカバーする広範な領域の研究者が集まりました。

伊達保健科学研究院長の開会の辞でシンポジウムは幕を開けました。笠原医学研究科長から祝辞をいただいた後、保健科学研究院およびインドネシア、台湾の協定校・大学病院の紹介を行いました(座長:山内)。小休止の後、招待発表者と本研究院の若手教員が研究発表を行いました。研究発表は3つのセッションからなり、第

1セッションはMedical Science/医科学(座長:山口教授)で、インドネシア、デポネゴロ大学のDr. Mexitaliaと筑波大学の大橋准教授、本研究院の松尾講師が発表しました。昼食休憩を挟み、第2セッションのNursing/看護学(座長:安積准教授)では、台北医学大学のProf. Lin、本研究院の佐藤講師と野口准教授が発表しました。最後の第3セッションはRehabilitation and Public Health/リハビリテーションと公衆衛生学(座長:遠山教授)と題し、台北医学大学のProf. Chiou、デポネゴロ大学のDr. Handoyo、そして本研究院の寒川准教授が発表しました。

いずれのセッションにおいても発表者、招待者、フロアの教員および学生の間で活発な議論が展開されました。9名の研究発表を終えて、齋藤副研究院長の閉会の辞でシンポジウムは幕を閉じました。記念撮影の後、海外からの招待者は北大病院の視察ツアーに参加しました。国際交流部門の担当教員の尽力と北大病院の担当者の手厚いご協力のお陰で、病院ツアーは招待者に大変好評でした。

シンポジウムの興奮もさめやらぬ中、前保健科学研究院長小林特任教授から身に余る言葉と乾杯の発声をいただき、懇親会が始まりました。日本の伝統的横笛「篠笛」の演奏、大学院生の英語によるスピーチ、記念品贈呈、記念撮影と盛りだくさんでした。大学院生は、皆それぞれ自己紹介とシンポジウムの感想を堂々と英語でスピーチして頼もしい限りでした。予報では雨が心配されましたが幸い天気にも恵まれ、朝から晩まで大変充実した一日となりました。

末筆になりましたが、海外・国内の招待発表者、座長および発表を引き受けていただいた保健科学研究院の教員の方々、当日および準備にご尽力いただいた国際交流専門部会員および事務の方々、ご挨拶をいただいた笠原医学研究科長、保健科学研究院長、同副研究院長、前研究院長そしてのべ190名以上を数えた、シンポジウムに参加いただいた教員、大学院生、学部生のみならずさまに感謝申し上げます。



サステナビリティ・ウィーク2013へ参加

北海道大学は持続可能な社会の実現に向け2007年から毎年サステナビリティ・ウィークを開催しております。保健科学研究院では下記の事業を企画しました。

・多くの皆様の参加をお待ちしております。(事前申し込み受付中です。10月25日(金)まで)

企 画 名	ようこそ!ヘルスサイエンスの世界へ
開 催 期 間	11月3日(日・祝) 13:00~16:00
主 催 者	大学院保健科学研究院公開講座委員会
会 場	中央キャンパス総合研究棟1号館 共同講義室-1
行 事 概 要	保健科学研究院の公開講座は、「ようこそ!ヘルスサイエンスの世界へ」と題し、3名の講師陣が、保健科学の視点から詳しくかつ分かりやすく解説します。 ご期待ください。 「リウマチ診療の進歩と画像診断」 神島 保 教授 「超音波でみる心臓の動きと血液の流れ」 三神大世 教授 「子どものうつと自殺に傾く心理」 傳田健三 教授
事前申し込み	10月25日(金)までに下記E-mailもしくは電話にてお申し込みください。
参 加 費	無料
問い合わせ先	保健科学研究院庶務担当 TEL: 011-706-3315 E-mail: shomu@hs.hokudai.ac.jp

平成25年度科学研究費(文部科学省・日本学術振興会)採択一覧

研究種目	新規 継続	氏名	分野・職名	研究課題
基盤研究(B)	新規	山内太郎	健康科学 教授	狩猟採集社会の子どもの身体とフィットネス:人類 進化の視座から子どもの健康を見直す
	継続	西岡 健	医用生理工学 教授	がん細胞は自身の生存をかけ放射線域を逃れる べく上皮間葉移行をなすのか
	継続	良村貞子	基盤看護学 教授	潜在看護職者の在宅ワークと連携する遠隔健康 相談システムの開発と検証
	継続	矢野理香	基盤看護学 准教授	回復期脳血管障害患者に手の動きの自覚と語り を促す手浴ケアの成果モデルの効果検証
基盤研究(C)	新規	横澤宏一	健康科学 教授	記憶成績低下メカニズムの脳磁場計測による探 究
	新規	浅賀忠義	機能回復学 教授	外乱刺激に対する運動学習の制御メカニズムに 関する研究:転倒予防の視点から
	新規	布田博敏	食品機能解析・保健栄養学 特任准教授	マガキで発見された新規抗酸化物質による肝臓 保護作用に関する研究
	新規	神 繁樹	健康科学 助教	原発性アルドステロン症鑑別における新たなバイ オマーカーの可能性
	新規	恵 淑萍	病態解析学 准教授	プラズマローゲンの網羅的解析と免疫測定法の 開発
	新規	佐藤三穂	基盤看護学 講師	糖尿病患者の自己管理行動に影響する要因の生 態学的アプローチを用いた解明
	継続	加藤千恵次	医用生理工学 教授	3テスラMRIを用いた心筋血流量および梗塞 病変の定量検出
	継続	笠原敏史	機能回復学 助教	加齢に伴う姿勢と運動制御の不安定化メカニズ ムの解明
	継続	佐伯和子	創成看護学 教授	行政保健師の多様なキャリアに対応したキャリア 総合的な発達測定尺度の開発
	継続	神島 保	医用生理工学 教授	関節リウマチ超音波検査:毛細血管ファントムの 再現性検討と機種間キャリブレーション
	継続	岩本幹子	基盤看護学 准教授	医療系大学院におけるインタープロフェッション 教育プログラムの構築と評価
	継続	青柳道子	創成看護学 講師	がん患者の配偶者が受けるソーシャルサポート一 尺度開発と精神的健康との関係一
	継続	高山 望	基盤看護学 助教	高次脳機能障害患者を支える主介護者の退院時 指導プログラムの構築
	継続	佐藤洋子	創成看護学 教授	小児医療における子どもの意思決定と看護支援 に関する基礎的研究
	継続	安積陽子	創成看護学 准教授	早産で生まれた子どもへのスリープマネジメン トによる睡眠習慣確立プログラムの構築
	継続	進藤ゆかり	創成看護学 助教	オピオイド鎮痛薬を使用している難治性非癌性疼 痛患者の慢性疼痛と共存の課程
	継続	小笠原克彦	健康科学 教授	GISに組み込んだシステム・ダイナミクスによる医 療環境の予測と可視化
	継続	武田晴治	健康科学 特任准教授	一粒子レベルでのリポ蛋白質酸化状態解析
	継続	傳田健三	生活機能学 教授	児童・青年期の双極性障害に関する臨床的、疫学 的研究
継続	境 信哉	生活機能学 准教授	重度心身障害を伴う大脳性視覚障害児・者を対 象とした視覚行動評価尺度の開発	
新学術(研究 領域提案型)	新規	山内太郎	健康科学 教授	ネアンデルタールのライフステージと栄養生態:サ ピエンスとの学習能力差の基盤の解明

研究種目	新規 継続	氏名	分野・職名	研究課題
挑戦萌芽	新規	真木 誠	生活機能学 助教	成人の自閉症スペクトラム障がいをもつ当事者の 内的世界を理解する
	新規	山内太郎	健康科学 教授	ピグミー系狩猟採集民の低身長 <small>の</small> 解明: 思春期ス パートの証明と存在意義
	新規	矢野理香	基盤看護学 准教授	LAMP法を用いた看護ケア環境累積微生物汚染 度の新評価システム構築
	新規	宮島直子	基盤看護学 准教授	バーチャルコミュニティで展開する対人スキル小 集団訓練プログラムの開発と試行評価
	新規	溝部佳代	基盤看護学 講師	多重ストレス時における精神活動変化の可視化と ストレスマネジメント方略
	継続	井上 馨	生活機能学 教授	眼圧コントロール作用点の同定: 高眼圧性疾患モ デルマウスの原因分子Vavによる研究
	継続	荒木奈緒	創成看護学 講師	胎児異常を診断された女性に対する妊娠期から 育児期への助産学的アプローチの検討
	継続	山本 徹	医用生理工学 教授	MR I 複素誘電率画像は細胞内水分子のネット ワーク構造を反映するか?
	継続	石津明洋	病態解析学 教授	自己血管内皮細胞反応性NK T細胞による中小型 血管炎発症モデル
若手研究(B)	継続	大内潤子	基盤看護学 助教	好物を食べると摂食・嚥下運動は向上するのか: 生理学的指標を用いた検討
	新規	寺下貴美	医用生理工学 助教	放射線技術学教育における問題解決型学習の評 価および教育効果の評価手法開発
	新規	松尾淳司	病態解析学 講師	肺炎クラミジアとカーボンナノ粒子による相乗的 な気管支喘息の増悪化機序
	新規	下田智子	基盤看護学 助教	周術期食道がん患者の回復過程と経時的栄養評 価の検証
	新規	コリー紀代	創成看護学 助教	多重タスク問題における学習者の視線と学習効果 に関するオントロジーの構築
	継続	本田 光	創成看護学 助教	子育て世代における「地域とつながる力」の概念構 築
特別研究員 奨励費	継続	齊藤展士	機能回復学 助教	上肢の運動パフォーマンス改善に寄与する姿勢学 習メカニズムの解明
	新規	山崎智拓	博士後期課程 1年	混合感染が病原性クラミジアの細胞修飾機構に 与える影響とその分子基盤の解明
	新規	萩野 泉	博士後期課程 2年	ピグミー系狩猟採集民の人口動態と生活史: 人口 変遷の歴史からみる集団存続の未来予測
	継続	石田香澄	博士後期課程 2年	病原体クラミジアのリンパ球細胞を巧みに利用し た感染防御回避機構の解明

報告事項

研究助成採択状況(25年1月～25年7月)

所属・氏名	財団等名称	種 目	題 目
創成看護学分野 講師 青柳 道子	笹川記念保健協力財団	研究助成	ホスピス緩和ケアに関する研究
病態解析学分野 教授 石津 明洋	伊藤医薬学術交流財団	研究助成	学会等助成
病態解析学分野 教授 石津 明洋	アステラス製薬	研究助成	自己血管内皮細胞反応性NKT細胞の制御による 血管炎症候群に対する新規治療法の開発 I.治療標的分子の探索

報告事項

受賞状況(25年1月～25年7月)

所属・氏名	受賞・表彰名称等	受賞論文名・研究題目・受賞理由等
病態解析学分野 特任教授 森山 隆則	日本臨床検査学協議会 教育功労賞	永年, 臨床検査学教育に従事し日本臨床検査学協議会副理事長・雑誌臨床検査学教育編集長として5年間勤め教育の向上に貢献した。
健康科学分野 特任助教 Shrestha Rojeet	National Academy of Clinic Biochemistry (NACB's) Distinguished Abstract Awards 2013	Qualitative Determination of Triacylglycerol Hydroperoxide in VLDL, Intermediate Density Lipoprotein and Human Plasma using Orbitrap Mass Spectrometer
博士後期課程1年 唐 明輝	第105回日本医学物理学会 英語プレゼンテーション賞	Vascular properties obtained from spin-echo signal fluctuations in the human brain
客員研究員 谷川原 綾子	第69回日本放射線技術学会総会 学術大会 学術展示賞 金賞	Construction of mammography ontology: Process and mammogram evaluation
博士後期課程1年 辻 真太郎	第69回日本放射線技術学会総会 学術大会 学術展示賞 銀賞	Constructing an Ontology for Visualization of Radiotherapy-related Risks
修士課程2年 佐々木 翔平	第69回日本放射線技術学会総会 学術大会 学術展示賞 銅賞	Bayesian network analysis of risk factors in radiotherapy using evidence theory and mutual information
修士課程2年 白石 祐太	北海道ヘリカルCT研究会 第37回研究会 優秀発表演題	320列ADCTにおける散乱線の評価

報告事項

保健科学研究院研究助成制度対象者(平成25年2月～平成25年8月)

分野	職名	氏名	備考
機能回復学	特任教授	福島 順子	
創成看護学	准教授	安積 陽子	
健康科学	教授	千葉 仁志	
病態解析学	講師	松尾 淳司	20%以内 ※2
病態解析学	准教授	恵 淑萍	20%以内 ※2
病態解析学	教授	石津 明洋	3編 内1編20%以内 ※2
病態解析学	特任教授	森山 隆則	
健康科学	特任准教授	武田 晴治	
健康科学	教授	小笠原克彦	
健康科学	教授	齋藤 健	2編 内1編10%以内 ※1

【研究助成制度】

- 対象：(1) 英文原著論文(査読有, IF有, first author)を執筆した教員
 (2) 英文原著論文(査読有, IF有)のcorresponding authorとなった教員
 (ただし, (1)に該当する論文のcorresponding authorとなった教員は除く)

助成の方法：論文1編につき10万円の研究費を対象教員に配分

- ※1 掲載雑誌のランキングが当該カテゴリーにおいて上位10%以内は20万円を追加配分
 ※2 掲載雑誌のランキングが当該カテゴリーにおいて上位20%以内は10万円を追加配分

報告事項

人事異動

平成25年3月31日

(任期満了)

福島 順子 機能回復学分野特任教授
 酒井 正春 健康科学分野特任教授
 宮崎 亮 健康科学分野特任助教
 小田嶋裕輝 基盤看護学分野博士研究員

(辞 職)

武田 直樹 機能回復学分野教授
 荻田 珠江 創成看護学分野助教
 松野とも子 医学系事務部保健科学研究院事務課係員(図書担当)

平成25年4月1日

(採 用)

川西 範明 健康科学分野特任助教
 櫻井 俊宏 病態解析学分野博士研究員
 芳賀 早苗 健康イノベーションセンター博士研究員
 渡邊 裕敬 医学系事務部保健科学研究院事務課係員(教務担当)
 渡邊菜津実 医学系事務部保健科学研究院事務課事務補助員(会計担当)

(昇 任)

浅賀 忠義 機能回復学分野教授
山内 太郎 健康科学分野教授
平野美千代 創成看護学分野准教授
寒川 美奈 機能回復学分野准教授
佐藤 三穂 基盤看護学分野講師
荒木 奈緒 創成看護学分野講師
松尾 淳司 病態解析学分野講師

(転 入)

遠山 晴一 機能回復学分野教授
(北海道大学病院リハビリテーション部准教授)
佐藤 有希 医学系事務部保健科学研究院事務課係長(教務担当)
(工学系事務部情報科学研究科事務課係長(教務担当))
平野 亮 医学系事務部保健科学研究院事務課主任(庶務担当)
(函館キャンパス事務部主任(庶務担当))
見目亜紀子 医学系事務部保健科学研究院事務課係員(図書担当)
(医学系事務部会計課係員(図書担当))
石森 久美 医学系事務部保健科学研究院事務課係員(図書担当)
(理学・生命科学事務部事務課係員(図書担当))

(転 出)

中澤 貴代 北海道大学病院助産師
(創成看護学分野講師)
樽見 和憲 農学事務部係長(学生支援担当)
(医学系事務部保健科学研究院事務課係長(教務担当))
佐々木えり子 北海道大学病院事務部総務課主任(労務管理係)
(医学系事務部保健科学研究院事務課主任(庶務担当))
橋本 由衣 附属図書館事務部管理課事務補助員(庶務担当)
(医学系事務部保健科学研究院事務課事務補助員(図書担当))

平成25年5月1日

(採 用)

山品 博子 基盤看護分野博士研究員

平成25年5月31日

(任期満了)

櫻井 俊宏 病態解析学分野博士研究員

平成25年6月1日

(採 用)

比留間貴久 病態解析学分野博士研究員

平成25年7月1日

(採 用)


野田なつみ 基盤看護学分野助教

(転 入)

高崎 峻介 医学系事務部保健科学研究院事務課係員(教務担当)
(医学系事務部総務課係員(人事担当))

(転 出)

大橋 友香 北海道大学病院事務部医事課医療支援室係員(地域医療連携係)
(医学系事務部保健科学研究院事務課係員(教務担当))



広報誌の名称 「プラテュス」の由来

保健科学研究院の玄関前には、大きな二本のプラタナスの樹があります。古代ギリシャの医者ヒポクラテスは、プラタナスの木陰で弟子たちに医学を説いたそうです。大きな広い葉をもつプラタナスは、ギリシャ語で「広い」を意味する platys(プラテュス、ギリシャ語では「πλατύς」と記す)に、その名が由来するとされています。本研究院が幅広い分野の専門家の集まりであることから、このプラタナスの語源になぞらえて「プラテュス」と命名しました。

広報室 (編集委員)

齋藤 健(広報室長)
溝部 佳代
加藤千恵次
政氏 伸夫
高橋 光彦
境 信哉
山内 太郎
恵 淑萍
武藤 幹夫(事務)

発行 北海道大学大学院保健科学研究院広報室
〒060-0812 札幌市北区北12条西5丁目
連絡先 庶務担当
電話 011-706-3315
E-mail shomu@hs.hokudai.ac.jp
URL <http://www.hs.hokudai.ac.jp>